

般若波羅蜜多 (prajñāpāramitā) の解釈

渡 辺 章 悟

はじめに

筆者は先に「プラジュニャー (prajñā) 再考」と題して、ウパニシャッドにおける prajñā の意義から、初期仏教への影響を考察した。本稿はそれに続いて仏教の般若思想の解明を目指すものである。本来なら、まず初期仏教の「般若」が検討されるべきであろうが、それについては、すでに西義雄、佐々木現順などの研究があるので、筆者は「般若」をタイトルにした「般若波羅蜜多経」を中心に、初期大乘仏教に資料を限定し、その思想的意味をより鮮明にしたいと思う。

特に本稿では pāramitā について為された、インド文献に特有の語源分析を中心に、経典自身の記述に即した般若波羅蜜多 (prajñā-pāramitā) の解釈を明らかにしてみたい。

【1】 パーラミター (pāramitā) の解釈

般若波羅蜜〔多〕とは prajñā-pāramitā の音訳であるが、般若 (prajñā) に「完成」の意味の波羅蜜多 (pāramitā) を加え、tatpuruṣa 合成語 (依主釈) で「智慧の完成」という意味となる。なお、玄奘はそれ以前の「波羅蜜」「婆羅蜜」に対して「波羅蜜多」と原音に添った音訳を行っているので、以下でもこれに従うこととする。

波羅蜜多 (pāramitā) はサンスクリット文法では「最高の、最上の」を意味する形容詞パラマ (parama) が、女性形パーラミー (pāramī) となり、これに抽象名詞をつくる接尾辞ター (-tā) を添加したもので、「完成、成就、最高」という意味とされる (パーリ語ではパーラミー pāramī とパーラミ pārami はあらゆる場合にシノニムである)。

すでに前稿で述べたように、般若 (prajñā) はウパニシャッドにも見られる智慧の概念であって、仏教独自のものではない。これに対し、般若波羅蜜多 (prajñā-pāramitā) は仏教に特有の概念である。おそらく仏教徒は従来の宗教でも重視される智慧としての般若 (prajñā) に、完成、最高という波羅蜜多 (pāramitā) をつけ加えることによって自己の思想的な独自性を表現したのであろう。

一方、この pāramitā を「到彼岸」と漢訳することがある。その場合には「悟り、彼岸」の意味の pāra の業格に、「行く」という動詞√i に、さらに接尾辞 (-itā) によって合成された語句で、「彼岸に到ること」(pāram+i+itā) と解釈したものである。これは菩薩行という教理に裏付けられた通俗語源解釈であり、文法的には必ずしも妥当ではないが、漢訳の「度」や「到彼岸」ばかりでなく、チベット語やモンゴル語訳も同じ解釈をとっているのである。

例えばチベット語訳のパロルトゥ・チンパ (pha rol tu phyin pa) は、パロルトゥ (pha rol tu) がパーラム (pāram), チンパ (phyin pa) がイター (itā) に相当するし、モンゴル語訳の cinadu kijayar-a kürügšen (gone beyond) も、チナドゥ・キジャガル・ア (cinadu kijayar-a) がパーラム (pāram), クルグセン (kürügšen) がイター (itā) であるから、同じ意味であることがわかる。このように、「彼岸に到ること」(pāram+i+itā) という般若波羅蜜多の理解は、仏教圏に広く行なわれていた有力な解釈であることがわかる。

【2】 注釈書による伝統的解釈

この解釈はすでにインド人による般若経の注釈にたどれる。たとえば『大品般若』の注釈で龍樹作と伝えられる『大智度論⁽³⁾』では、「悉く諸法の実相を遍知する智慧を般若波羅蜜と名づく」といいながら、「智慧の大海の彼岸に到り、一切智慧の辺に到りて、その極を窮尽するを以てのゆえに、到彼岸と名づく⁽⁴⁾」、あるいは「菩薩は智慧を行じ、彼岸に度らんことを求むるが故に、波羅蜜多と名づけ、仏は已に彼岸に度りたもうが故に、一切種智と名づく⁽⁵⁾」といている。このように、菩薩がブッダの悟り(彼岸)を希求するという意味で、その智慧を「彼岸に度る」(波羅蜜多)と語源解釈してい

るのである。

また、八世紀の中観派の論師ハリバドラは『八千頌般若』の注釈である『現観莊嚴論釈光明』のなかで、詳細な文法的解釈を導入して注釈しているが、そこで明らかなのは波羅蜜多を、“卓越した究極の「彼岸に」「行く」*pāram eti* (<√i)”と分解し、実質的にパーラム (*pāram*) + イター (*itā*) という解釈を支持していることである。

同じく中観派のチャンドラキールティもその主著『入中論』⁽⁷⁾で、「*pāra* というのは輪廻の海に向かう側とか彼岸である。即ち一切の煩惱障と所知障とを断ずることを自性とする仏位 (*buddhatā: sangs rgyas nyid*) である。*pāramitā* とは彼岸に到ることである。“合成語の後部がある場合には〔その前を〕省略してはならない”という〔パーニニの〕この規定は、業格を省略しないから、〔*pāra-itā* > *pāretā* とならず *pāramitā* と云う〕形になる。或いはプリショーダラ (*prṣodara*) 等であるからム (*m*) を語尾とする形になる⁽⁸⁾」と述べて、何とか会通させようとしている。

干潟龍祥はこの伝統説に従いながらも、「彼岸に到達した」というパーラミタ (*pāram-ita*) に接尾辞ター (-*tā*) を添加し、パーラミタター (*pāram-ita-tā*) という語を想定し、さらに contraction (省略化) によってタ (*ta*) が脱落してパーラミター (*pāramitā*) という語が出来たとする修正案を提唱している (*pāram-ita+tā* > *pāramitā*)⁽⁹⁾。これも教理的解釈の一つに入るだろう。

しかし、このようなパーラミターの解釈が文法的に不可能であることは、現代の諸学者によって指摘されている⁽¹⁰⁾が、それでもパーラミターが悟りを得るための実践であるという信念から、長い間、意識的に、あるいは無意識的に「彼岸 (菩提) に到達すること (もの)」という解釈を捨てることはなかったであろう。

また、実際にはこの言葉が果たして古典サンスクリットに則ったものかどうか未解明なのである。たとえば、パーリ仏教や *Mahāvastu* (『大事』) 等の古い梵語仏典にはパーラミー (*pārami*) とあって、「最上、究極」の意味である *parama* に所有を表わす語尾 *-in* からなる合成語とされる。このパーラミー (*pārami*) に抽象名詞を造る接尾辞 *-tā* を付加して形成された語が *pāramitā* であるとする解釈もある⁽¹¹⁾が、これも確定的ではない。

【3】 智慧の完成 (prajñāpāramitā) の四つの解釈

次に従来あまり注目されることのなかった箇所ではあるが、「完成 (pāramitā 波羅蜜多)」の語源分析に基づいて、「智慧の完成」(prajñā-pāramitā) の定義を行なう箇所が拡大般若經に共通して見られるので、以下にこれを検討してみたい。用いた資料は大品 (AD—PV) 系類書に属するサンスクリット 2 本、チベット語訳 3 本、漢訳 4 本である。

なお、大品 (AD—PV) 系類書の表現の違いを明らかにするため、それぞれのテキストを並列して引用してある。もちろん本文は一連の文章であるが、便宜的に五つに分けて掲載した。

<略号及び引用箇所>

PV: The Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā (二万五千頌般若) V, Sankibo: Tokyo, 1992, ed. by T. Kimura, p. 127, ll. 12—24.

PKG: Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa (二万五千頌般若), Peking ed., vol. 19, No. 731, Di 19b2—20a1. (經部)

PTG: Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa (二万五千頌般若), Peking ed., vol. 89, No. 5188, Ca 277b8—272a 6. (論部)

AD: The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikā prajñāpāramitā (一万八千頌般若), Chapter 55 to 70 Corresponding to the 5th Abhisamaya, ed. by E. Conze, Chap. 63, p. 151.

ADT: 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa khri brgyad stong pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (Ārya-aṣṭādaśa-sāhasrikā prajñāpāramitā nāma mahāyānasūtra 聖一万八千頌般若經), Peking ed., vol. 20, No. 732, Phi 13a4—13b2.

大品:『摩訶般若波羅蜜經』27 卷, 90 品 鳩摩羅什 (Kumārajīva) 訳, T8, No. 223, 376a.

放光:『放光般若』20 卷, 90 品 無叉羅 (Mokṣala) 訳, T8, No. 221, 114b.

二会:『大般若波羅蜜多經』<第二会>78 卷 (401-478 卷), 85 品, 玄奘訳,

T7, No. 220, 338b.

三會：『大般若波羅蜜多經』〈第三會〉59 卷 (479-537 卷)，31 品，玄奘訳，
T7, No. 220, 696a.

以下のように、最初に長老スプーティが世尊に対して“般若波羅蜜多とは何か”という質問をして、それに世尊が答える対話形式で展開する。

「これに対して、長老スプーティは以下のように世尊に申し上げた。

“般若波羅蜜多，般若波羅蜜多と言われるが，どのような理由で般若波羅蜜多と言われるのでしょうか。”」

evam ukte āyusmān subhūtir bhagavantam etad avocat:
prajñāpāramitā prajñāpāramitety bhagavann ucyate, kena-
arthena prajñāpāramitety ucyate?¹⁹

この問いに対して，次のような四つの根拠が示されるのである。

- ①「最高の完成を実現した」(parama-pāramitā-prāpta)
- ②「彼岸に到った」(pāraṅgata)
- ③「認知されない」(nopalabdha)
- ④「包摂している」(antargata)

これらのうちの最初の二つは pāramitā の語源分析を通して行なわれていて，先に掲げた従来の二つの解釈（「完成」と「到彼岸」）に対する經典中の根拠になるべきものである。後の二つは般若波羅蜜多の内容の特性に基づいた解釈である。これらを順次検討することにする。

【3-1】 第一の解釈 〈parama-pāramitā-prāpta〉

PV bhagavān āha: parama-pāramitaiṣā subhūte sarvadharmān(sic)-
ām agamanārthena prajñāpāramitety ucyate.

PKG bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa, rab 'byor shes rab kyi pha
rol tu phyin pa 'di ni chos thams cad kyi pha rol tu phyin pa'i
dam pa thob pa yin te, de'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin
pa zhes bya'o.

PTG bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa, rab 'byor shes rab kyi pha
rol tu phyin pa 'di ni chos thams cad kyi pha rol tu phyin pa'i
dam pa thob pa yin te, de'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin
pa zhes bya'o.

AD bhagavān āha: parama-pārami-prāptaisā* subhūte prajñā-
pāramitā sarvadharmāṇām,* tenārthena prajñāpāramitety
ucyate.

ADT bka' stsal pa, rab 'byor shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di
ni, chos thams cad kyi pha rol dam pa ste, de'i phyir shes rab
kyi pha rol tu phyin pa zhes bya'o.

大品 仏言。得第一義(宮：一)，度一切法，到彼岸。以是義故名般若波羅蜜。

放光 仏言。得度第一諸法之度。最第一度三乘之道。

二会 仏告善現，甚深般若波羅蜜多，到一切法究竟彼岸，故名般若波羅蜜
多。

三会 仏告善現，由此般若波羅蜜多，到一切法究竟彼岸，依此義故名為般
若波羅蜜多。

PV によれば「世尊は仰せられた。スプーティよ，これ〔＝般若波羅蜜多〕
は，あらゆるものの最高の完全性であって，対象に向かわないという意味
によって般若波羅蜜多といわれるのである」という意味であるが，これは
般若波羅蜜多のはたらきを逆説的に表現したものであって，他の類本と較
べるとかなりユニークな表現といえる。

ただしこれと相似した表現は，『八千頌般若』⁰⁸，『二万五千頌般若』⁰⁹ にもあ
る。それによれば「すべてのものが去らないことによって，無去の完成で
ある」(agamana-pāramiteyam …… sarvadharmāgamanatām upādāya) とい
い，prajñā-pāramitā の異名として agamana-pāramitā をあげるもので

ある。PV の第一の解釈がこれらと同じ意義を持つものであるとするなら、上述の訳も必ずしも無理なものではない。

次に PV の下線部を AD と比較すると、AD は parama-pārami-prāptaiṣā となっているが、それに対応する PV には [prāptā] がすっぽり抜け落ちている。逆に後半の波線部では、AD は PV の「対象に向かわないという意味によって」(agamanārthena)にある [agamana] を欠き、tenārthena となっていて、結果として全く異なった文脈になっている。

AD のサンスクリットを翻訳すると、「世尊は仰せられた。スプーティよ、この般若波羅蜜多は、あらゆるものの最高の完全性に到っている。その意味で般若波羅蜜多といわれるのである」となる。これはサンスクリットの表現としても、他の伝承との関連からも妥当なものであって、第一の解釈の基本とすべきと考える。そのチベット語訳 (ADT) では「これはあらゆるものの最高の完成 (pha rol dam pa) であって、そのために般若波羅蜜多と云われるのである」といい、AD から prāpta を欠いたさらに簡潔な形となっている。

漢訳の中、『大品』は「第一義を得て、一切法をこえて、彼岸に到らせる。この意味で般若波羅蜜と名づけるのである」とする。これは、①得第一義、②度一切法、③到彼岸という三段による解釈とみられるが、『大智度論』に引用される『大品』では「得第一義、度一切法、到彼岸」ではなく、「得第一度一切法到彼岸」云々となっている。また、「大正藏經」の脚註にある宮内省図書寮本 (旧宋本) のように「義」の字を欠く伝承もある。加えて、それに対する『大智度論』の注釈箇所では⁹⁹ 何度も「菩薩は上智をもって度するが故に<第一度>と名づく」などと注解していることから、ここは「第一度を得て、一切法の彼岸に到る」と読むべきであろう。

『放光』の「第一の諸法の度を得度す」は、この二つの句が一つに表現されているものであろう。『大般若波羅蜜多經』「第二会」と「第三会」も「一切法の究竟の彼岸に到る」とすることから、『放光』と同趣旨であり、AD とよく一致する。

ところで、AD の parama-pārami-prāptā 「[あらゆるものの] 最高の完全性に至った」という用法は、F. エジャトン⁹⁹によれば、pārami-prāptā、あるいは pāramitā-prāptā と書写され、多くの大乗經典に頻出する。

例えば、『ラリタヴィスタラ』(p. 425, l. 22) や『法華經』[の韻文部分]に

は、何箇所かに parama-pāramitā-prāpta 「最高の完成の状態に達している」の用法がある。『法華經』の例をとれば以下になる。

- ① sarvacetovaśitā-paramapāramitāprāpta-(p. 1, l. 8) ((1200 人の比丘衆は…) あらゆる心の動きを制御して、最高の完成の状態を完成している): 「心得自在」(心自在を得る)
- ② mahopāyakaśālyā-jñānadarśana-paramapāramitāprāpta-(p. 29, l. 10): ((如来は) 偉大で巧妙な手段を用いる智慧を示すことでは、最高に熟達している。): 「(如来) 方便, 知見波羅蜜, 皆已具足。」((如来は) 方便と知見波羅蜜とを皆, 已に具足したればなり。)
- ③ mahopāyakaśālyā-jñāna-paramapāramitāprāpta-(p. 77, l. 8) ((如来は) 素晴らしく智慧を働かせて、巧妙な手段を用いることでは奥義を極めている): 「具足方便, 智慧波羅蜜。」(方便・智慧波羅蜜を具足し)
- ④ sarvadharmā-viniścaya-kaśālyā-jñāna-paramapāramitāprāpta-(p. 121, l. 9) ((如来は…) あらゆる教えを巧みに識別する智慧が最高の完成の状態に達している): 「於諸法, 究尽明了。」(諸法を究尽して明了にし)

これらの中で、①以外は「如来の功德」の説明に関するものである。これはこの表現が如来という理想の存在の完全性を示すものであることを明らかにしている。実現されるべき最高存在の特性が、この表現によって規定されるのである。

これら四つの用例にはすべて parama-pārami-prāptā, あるいは -parama-pārami-prāpta- という異読を伝える写本がある。⁶⁰このことから、これらの表現には伝承の相違といった揺れがあり、確定的な表現形式を設定することは不可能であることも付加しておく。

ただし、これを「迷いの此岸から悟りの彼岸に到達した状態となった」と解釈するのは、しばしば行なわれるものではあるが、意識し過ぎであり、以後に述べる第二の解釈と混同したものと云わざるを得ない。このことについては、後に詳しく述べるつもりである。

ここで注目したいのは①sarvacetovaśitā-paramapāramitāprāpta- である。②から④までは仏陀の特性として文中に登場する用例であったのに対し、①は後述するように多くの大乘經典の冒頭で説法の会座の状況を説明するために、定型句として記される伝統的表現だからである。

通常の大乘經典では仏陀の説法に対する対告衆として比丘が登場する

が、その比丘の特質 (śrāvaka-guṇa) は、常に定まった形式の説明で結ばれる。その定型的語句の最後こそが「心を制御するあらゆる “最高の完成に到達していた”」 sarva-ceto-vaśi-“parama-pāramitā-prāpta” なのである。この定型的フレーズを含む主な大乘經典として、『般若経』、『大無量寿経』、『法華経』、『維摩経』などがあげられることは、すでに指摘されている。

例えば、「般若経」では『八千頌般若』、『一万頌般若』、『二万五千頌般若』、『十万頌般若』に見られる。以下にその文脈を見るために、般若経に記される「比丘衆の特質」についての定型句を、煩を厭わず全文引用しておく。

a) 比丘衆の特質 (śrāvaka-guṇa) についての定型句 I

〔これらの比丘は〕すべて阿羅漢であり、穢れを断ち、煩惱がなく、自己に克ち、心はまったく解放され、智慧も自由にはたらき、高貴の家の生まれであり、偉大なる象のようであった。為すべきことを為し、為さねばならぬことを為しおえて、重荷をおろし、自己の目的を達成し、生存の束縛を断ち切り、正しい了知によって心はまったく解放され、心を制御する、あらゆる最高の完成に到達していた。

[bhikṣu-śataiḥ] sarvair arhadbhiḥ kṣiṇa-āsravair niḥkleśair vaśibhūtaiḥ suvimukta-cittaiḥ suvimukta-prajñair ājāneyair mahā-nāgaiḥ kṛta-kṛtyaiḥ kṛta-karaṇiyair apahrta-bhārair anuprāpta-svakārthaiḥ parikṣiṇa-bhava-saṃyojanaiḥ samyag-ājñā-suvimukta-cittaiḥ sarva-ceto-vaśi-parama-pārami-prāptaiḥ

このように、この冒頭の定型句において、対告衆の比丘の特質 (śrāvaka-guṇa) を述べる最後に、sarva-ceto-vaśi-parama-pārami(tā)-prāpta (心を制御するあらゆる最高の完成に到達していた) と結ばれるのである。

これについての般若経の注釈者の解釈を見てみよう。そのうち、最後の特質の箇所 (下線部分) について、ハリバドラは『現観莊嚴論光明』で、

「常に心に」、九次第定の特徴を持ち、自分の意志で「制御している」。
またそれらは汝にとって「最高の完成である」とは、自からの能力が卓越した究極の状態に「達しているのである」。

sarvatra cetasi navānupūrva-vihāra-samāpatti-lakṣaṇe svātān-

tryād vaiśiṇah, te ca te parama-pāramiṃ sva-gotra-prakarṣa-
paryanta-gatiṃ prāptāś

と言い換え、さらに

特別な神通等の性質に自在である、自己の能力の向上に向かっているから「心を制御する、あらゆる最高の完成」であると、そのように結びつくのである。

vaiśeṣikābhijñādi-guṇa-vaśitva-sva-gotrotkarṣa-gamanāt sarva-
ceto-vaśi-parama-pāramitā iti tathaiva sambandhaḥ

と注釈している。この解釈は「最高の完成した状態」という parama-pārami(tā) の解釈を明確にするものである。

b) 比丘衆の特質 (śrāvaka-guṇa) についての定型句 II

ところでもともとこの定型句の原型は『律藏』などの原始仏教經典に、繰り返し説かれていたものであるが、それは a) に引用したものより簡潔で、微妙ではあるが重大な相違がある。以下にそれを例示してみたい。

〔彼は〕阿羅漢で、穢れを断ち、修行を完成し、為すべきことを為し、重荷をおろし、自己の目的を達成し、生存の束縛を断ち切り、正しい了知によって解脱していた。

[yo pi so bhikkhave bhikkhu] araham khīṇāsavo vusitavā
katakaraṇiyo ohitabhāro anuppattasadattho parikkhhiṇa-
bhava-saṃyojano samma-d-aññā vimutto⁸

両者を比較すると、大乘經典の方がかなり詳細になっていて、次の要素が加わっていることが解る。

「煩惱がなく、自己に克ち、心はまったく解放され、智慧も自由にはたらき、高貴の家の生まれであり、偉大なる象のようであった。…為さねばならぬことを為しおえて、…心を制御する、あらゆる最高の完成に到達していた。」

このように、最後の問題の部分 “sarva-ceto-vaśi-parama-pārami-prāptair” (あらゆる心を制御して、最高の完成に到達していた) は、初期仏典にはもともとなかったもの、つまり、大乘の加筆と見做すべきもののなのであ

る。また同じ系統の大乗經典にしても、古い形態には含まれていないという傾向も指摘できる。そうであるなら、定型句に敢えて加筆した目的は何であるかが次の問題となるだろう。

すでに述べたように、この最後の章句の後半部分 (parama-pārami-prāpta) は波羅蜜 (pāramitā) の定義に用いられた語と完全に一致する。大乗經典、特に般若經においては、すべての修行者は般若波羅蜜多を實踐すべきと説くのであるから、この加筆が波羅蜜行を念頭に置いて經の冒頭に付加したと考えることは、少しも不自然ではない。むしろ、積極的に、この加筆は智慧の完成を主張する大乘仏教側からの自己主張であったと解することもできよう。このことから筆者は波羅蜜多の語源でもある「最高の完成に到達していた」という解釈を、般若波羅蜜多の意義の第一として高く位置づけるのである。

【3-2】 第二の解釈 <pāraṅgata>

第二の根拠は「向こう岸に到った」(pāraṅgata) という伝統的な通俗語源解釈に基づくもので、以下に和訳と共に併記しておく。

PV api tu khalu punaḥ subhūte etayā prajñāpāramitayā sarva-śrāvaka-pratyekabuddhā bodhisattvās ca mahāsattvās tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ pāraṅgatās tenārthena prajñāpāramitety ucyate.

(さらにまた、スプーティよ、この般若波羅蜜多によってすべての声聞、独覺、菩薩、摩訶薩、如来、阿羅漢、正等正覺者たちが、向こう岸に到った。そのために般若波羅蜜多といわれるのである。)

PKG rab 'byor gzhan yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dis, nyan thos dang, rang sangs rgyas dang, byang chub sems dpa' sems dpa' chen po dang, de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas thams cad, chos thams cad kyi pha rol tu phyin par gyur, pha rol tu phyin par 'gyur pas, de'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin pa zhes bya'o.

(さらにまた、スプーティよ、この般若波羅蜜多によってすべての声聞、独覚、菩薩・摩訶薩、如来、阿羅漢、正等正覚者たちが、あらゆるものの完成に到った。完成に到るであろう。そのために般若波羅蜜多といわれるのである。)

PTG rab 'byor gzhan yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dis nyan thos dang rang sangs rgyas dang byang chub sems dpa' sems dpa' chen po dang de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas thams cad chos thams cad kyi pha rol tu phyin par gyur, pha rol tu phyin, pha rol tu phyin par 'gyur bas, de'i phyir, shes rab kyi pha rol tu phyin pa zhes bya'o.

(さらにまた、スプーティよ、この般若波羅蜜多によってすべての声聞、独覚、菩薩・摩訶薩、如来、阿羅漢、正等正覚者たちが、あらゆるものの完成に到った。完成に到る。完成に到るであろう。そのために般若波羅蜜多といわれるのである。)

AD api tu khalu punaḥ subhūte anayā* prajñāpāramitayā sarva-śrāvaka-pratyekabuddhā bodhisattvāś ca mahāsattvā* tathāgatāś* ca*-arhantaḥ samyak sambuddhā* pāramgatā* gacchanti* gamiṣyanti*, tenārthena prajñāpāramitety ucyate.

(さらにまた、スプーティよ、その般若波羅蜜多によってすべての声聞、独覚、菩薩、摩訶薩、如来、阿羅漢、正等正覚者たちが、向こう岸に到っており、到り、到るであろう。そのために般若波羅蜜多といわれるのである。)

ADT rab 'byor yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dis nyan thos dang, rang sangs rgyas thams cab dang, byang chub sems dpa' sems dpa' chen po dang, de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas thams cad chos thams cad kyi pha rol tu son pas na, de'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin pa zhes bya'o.

(また、スプーティよ、その般若波羅蜜多によって声聞と、すべての独覚と、菩薩と摩訶薩と、すべての如来、阿羅漢、正等正覚者たちが、あらゆるものの完成に到っているならば、そのために般若波羅蜜多といわれるのである。)

大品 復次須菩提，諸仏菩薩辟支仏阿羅漢。用是般若波羅蜜得度彼岸。以是義故名般若波羅蜜。

放光 諸如來無所著等正覺乘。皆乘般若波羅蜜得到彼岸。是故言般若波羅蜜。

二會 復次善現，由深般若波羅蜜多聲聞獨覺菩薩如來能到彼岸，故名般若波羅蜜多。

三會 復次善現，由此般若波羅蜜多，聲聞獨覺菩薩如來能到彼岸，依此義故名般若波羅蜜多。

PV の pāraṅgata はサンスクリット語辞典には見られないが，pāra と gata との Accusative Tatpuruṣa compound である pāraṅgata の音韻変化であり，（存在の極みである）「向こう岸に到った」という形容詞と解釈すべきである。

AD では pāraṃ gatā gacchanti gamiṣyanti（「彼岸に到った，到る，到るであろう」）として，その働きが過去・現在・未来にわたっていることが教示されている。これは PTG とのみ共通で，その他の類本にはみられない特色であり，般若波羅蜜多の働きを強調するために増広された箇所と見做される。さらに注目すべきことに，その最初に pāraṃ gatā とあるように，pāra は Accusative を採っていて，先の推定を補強する。

確かにこの二語はコンパウンドにはなっていないが，それはこのギルギット写本をローマ字によって刊行したコンゼの文脈上の解釈である。おそらくは，ADT (pha rol tu son pa) にあるように，もともと pāraṃ gata-であったものが，現存の PV のように，あるものは pāraṅgata となり，他方は AD のような pāraṃ gatā gacchanti gamiṣyanti と増広され，異なった二つの伝承が生じたのであろう。

次にこの定義にはもう一つの重要な意義がある。つまり，この般若波羅蜜多によってすべての声聞等が悟りに「到った (pāraṅgatā)」という語を pāraṃ gatā の合成語と解すると，[1] で行なった波羅蜜多の語源解釈がここでも適応できるのである。

既に述べたように、pāramitā には pāram (向こう岸に) + i (「到達した」を意味する√i の過去分詞 -ita の ta を省略) + tā (状態) とする解釈が伝統的にあった。これに加えて、この語の中にある「行く」を意味する動詞 √i は √gam と、その過去分詞 -ita は -gata に意味上対応する。したがって、ここで pāraṃgata と言い換えられる pāramitā の定義も、実は -ita と -gata の同義性を利用した etymology による解釈なのである。この場合にのみ「迷いの此岸から悟りの彼岸に到達した状態」という理解が妥当となる。

【3-3】 第三の解釈 <nopalabdha>

PV api tu khalu punaḥ subhūte paramārthena yo 'rthah sarvadharmānām abhinnaḥ, sa iha prajñāpāramitāyāṃ tathāgatair arhadbhiḥ samyaksambuddhaiḥ, sarvadharmesu pāro nopalabdhas tenārthenocyate prajñāpāramitā. iti mārga-saṃmoha-vikalpah

(さらにまた、実にスプーティよ。最高の意味としておよそあらゆるものの実在性が不可分であるなら、実に般若波羅蜜多において、かれら如来・阿羅漢・正等正覚者たちは、あらゆるものに対する限界 pāra を認知しない。その意味で般若波羅蜜多といわれるのである。「以上が道についての無知の構想である」)

PKG rab 'byor gzhan yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dis, chos thams cad kyi mchog gi tshul phyed de, chos de dag kun la yang 'khor ba mi dmigs pas de'i phyir, shes rab kyi pha rol tu phyin pa zhes bya'o.

(さらにまた、スプーティよ。この般若波羅蜜多によって、あらゆるものの最高の方法を明らかにして、それらのものが、あらゆるところにおいて、再び輪廻することは認められない。その故に般若波羅蜜多といわれるのである。)

PTG rab 'byor gzhan yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dis chos thams cad ky i mchog gi tshul phyed de, chos de dag kun la yang 'khor ba ma dmigs pas de' i phyir shes rab kyi

pha rol tu phyin pa zhes bya ba ni lam la kun tu rmongs pa'i rnam par rtog pa yin no.

(さらにまた、スプーティよ。この般若波羅蜜多によって、あらゆるものの最高の方法を明らかにして、それらのものが、あらゆるところにおいて、再び輪廻することは認められない。その故に般若波羅蜜多〔といわれる〕。以上が、道についての無知の構想である。)

AD api tu khalu punaḥ subhūte paramārthena yo 'rthah sarvadharmāṇām abhinnaḥ sa.* iha prajñāpāramitayāḥ* tāis ca* tathāgatair arhadbhiḥ samyaksaṃbuddhaiḥ sarvadharmesu pāro nopalabdhas, tenārthena prajñāpāramitety ucyate.

(さらにまた、実にスプーティよ。最高の意味として、あらゆるものの実在性は不可分であるなら、かれら如来・阿羅漢・正等正覚者たちは、般若波羅蜜多を通して、あらゆるものに対する限界 pāra を認知しない。その意味で般若波羅蜜多といわれるのである。)

ADT rab 'byor yang don dam par chos thams cad dbyer med pa'i don gang yin pa de shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dis de bzhin gshegs pa rnam kyis mngon par rdzogs par sangs rgyas te, de'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin zhes bya'o.

(また、スプーティよ、最高の意味としては、あらゆるものは区別できないものである。それを諸仏はこの般若波羅蜜多によって現等正覚する。その故に般若波羅蜜多と云われるのである。)

放光 又復超越諸法之塵不得堅要。是故復言般若波羅蜜。

大品 復次須菩提，分別籌量破壞一切法乃至微塵。是中不得堅實。以是義故名般若波羅蜜。

二會 復次善現，甚深般若波羅蜜多，分析諸法過極微量，竟不見有少實可得，故名般若波羅蜜多。

三會 復次善現，由此般若波羅蜜多，依勝義理分拈（析）諸法乃至無有少分可得，依此義故名爲般若波羅蜜多。

PV によれば「さらにまた，実にスプーティよ。最高の意味としてあらゆるものの実在性が不可分であるなら，実に般若波羅蜜多において，かれら如来・阿羅漢・正等正覺者たちは，あらゆるものに対する限界 pāra を認知しない。その意味で般若波羅蜜多といわれるのである」となる。したがって，この場合の pāra は「この世」に対する「かの世，対岸」というより「究極的な到着点」あるいは「限界」という意味であろう。勝義という立場からみると，すべてはもともと不可分にして不壞 (abhinna) なるものである。その場合には迷いの存在や，そこから離脱した境涯という区別はないのであるから，諸仏が完全な智慧によって到るべき目標としての悟り (pāra) さえも認知しない。そのように〔認知するのが〕完全な智慧であるという。これは第二の解釈 (pāraṅgata) に基づきながら，さらにそれを超越した見解といえよう。

ところで PV と AD は，AD に＊印を付した点を除いて大体等しく，文法上の整合性という点では AD よりも PV が依拠されるべきであろう。

一方，これとは異なり PV のチベットの二訳は内容がほぼ同じであり (PTG は PV に対応する Abhisamaya の科文を付加するのみ)，pāra を対岸と解釈している。つまり，「この世」から「かの世」への転生という意味であるとして，「再び輪廻すること」(yang 'khor ba) と翻訳したものであろう。「輪廻することが認められない」とは解脱することであり，それが般若波羅蜜多の機能なのである。

漢四訳はこの pāra に相当する語を欠く。また，PV・AD にある “tais tathāgatair arhadbhiḥ samyakṣambuddhaiḥ” (彼ら如来・阿羅漢・正等正覺者たちは)，あるいは PV のチベット二訳 (PKG, PTG) の “chos de dag” (すべての者) という＜動作主を欠く＞共通の相違はあるが，文脈上は PV・AD に近く，ADT とは完全に一致し，認知せずという般若波羅蜜多の逆説的智慧を述べる。そして，勝義としてすべてが不可分である。このことを覚る仏智が般若波羅蜜多なのであるという。

【3-4】 第四の解釈 〈antargata〉

PV api tu khalu punaḥ subhūte prajñāpāramitāyāṃ tathatā
 'ntargatā, bhūtakotīr antargatā, dharmadhātur antargataḥ
 tenocyate prajñāpāramiteti.

PKG rab 'byor gzhan yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di de
 bzhin nyid kyang chud, yang dag pa'i mtha' yang chud, chos
 kyi dbyings kyang chud de, de'i phyir shes (20a) rab kyi pha
 rol tu phyin pa zhes bya'o.

PTG rab 'byor gzhan yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dir
 de bzhin nyid kyang chud, yang dag pa'i mtha' yang chud,
 chos kyi dbyings kyang chud de, de'i phyir shes rab kyi pha
 rol tu phyin pa zhes bya'o.

AD api tu khalu punaḥ subhūte iha* prajñāpāramitāyāṃ tathatā
 antargatā bhūtakotīr antargatā, dharmadhātur antargatās,*
 tenārthenocyate* prajñāpāramitety.

ADT rab 'byor yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'dir de
 bzhin nyid kyang chud yang dag pa'i mtha' yang chud, chos
 kyi dbyings kyang chud pas, de'i phyir shes rab kyi pha rol tu
 phyin pa zhes bya'o.

大品 復次須菩提，諸法如法性實際。皆入般若波羅蜜中。以是義故名般若
 波羅蜜。

放光 真際法性及如，皆入般若波羅蜜中。是故言般若波羅蜜。

二會 復次善現，此深般若波羅蜜多苞（包）含真如法界法性廣說乃至不思

議界、故名般若波羅蜜多。

三會 復次善現，由此般若波羅蜜多，攝藏真如法界法性広説乃至不思議界，依此義故名爲般若波羅蜜多。

この章句は各本ともにほぼ同一である。便宜的に AD を訳すと、「さらにまたスプーティよ。実に般若波羅蜜多の中に、ものの実在性〔真如〕は包摂されており、存在の極み〔實際〕は包摂されており、存在の構成要素〔法界〕は包摂されている。その意味で般若波羅蜜多といわれるのである」となる。

真如、實際、法界などの実在を表わす概念はすべて般若波羅蜜多に属するものである。その意味で、般若波羅蜜多はすべての実在の別名ともいえる。『智度論』にて「智慧の完成はすべての智慧を包摂する。というのも、菩薩が仏道を追求するに当たっては、すべての仏の教えを学び、すべての仏の教えを学び、すべての智慧、すなわち声聞の智慧、辟支仏の智慧、仏の智慧のすべてを獲得しなければならないからである。」というように、この広大にして無限なる智慧こそが「完全な智慧」であるというのがこの箇所⁹⁰の解釈である。

【4】 まとめ

以上、本稿は従来あまり検討されることのなかった四つの「*prajñā-pāramitā* の解釈」の説を、AD-PV 系統（一万八千頌・二万五千頌般若経）の諸本を資料として、比較検討した。

その四つとは主に、*pāramitā* に視点を当てたもので、

- ① *pāramitā*（完成）の語義解釈として最も妥当な *parama-pārami-
[prāptā]*（〔あらゆるものの中での〕最高の完全性〔を実現した〕）とするもの、
- ② 歴史的に最も多く取られていた教理的解釈で、聖者たちがこの般若波羅蜜によって、彼岸（悟りの領域）に到った（*pāraṅgatās*）ということ、
- ③ 「〔限界 *pāra* が〕認知されない（*nopalabdha*）智」、あるいは「〔すべてのものが勝義として〕不可分（*abhinna*）であることを明らかに覚る」仏智という逆説的機能、
- ④ 「〔真如などを〕包摂する」（*antargata*）という論理的・空間的広がりを持

ったものである。

これらはいずれも「智慧の完成」の属性についての規定であり、その中で、①の解釈を文法上では最も重視すべきものとして詳論し、そのパラレルを初期仏典と大乘經典の定型句に見いだした。さらにその意義を般若波羅蜜多の宣言と見做し、②の etymological な伝統的解釈と混同すべきではないことを指摘した。この①と②は pāramitā に視点を当てた解釈であり、③と④とは prajñā のはたらきを重視しつつ、①と②の解釈を補足するものであった。

これらの検討によって、従来ややもすれば曖昧であった prajñāpāramitā の概念に、多少なりとも經典に即した理解が行なわれる可能性を提供できたと考える。

【注釈】

- (1) 渡辺章悟「プラジュニャー (prajñā) 再考」『東洋大学文学部紀要』(第49集・印度哲学科篇・第21号) 1996. 3, pp. 76-90.
- (2) 西義雄『原始仏教に於ける般若の研究』大倉精神文化研究所, 1953 (大東出版社, 1978 再刊); Genjyun H. Sasaki, "Jñāna, Prajñā, Prajñāpāramitā," *Journal of the Oriental Institute*, Vol. 15, No. 3-4, M. S. University of Baroda, 1966, pp. 258-272; G. C. Nayak, "Prajñā Pāramitā: A Unique Insight in the Mādhyamika Thought," *Amalā Prajñā: Aspects of Buddhist Studies*, Professor P. V. Bapat Felicitation Volume, Sri Satguru Publications: Delhi, 1989, pp. 229-234.

なお、実質的に般若波羅蜜の意義を分析したものとして、梶芳光運「波羅蜜の一考察」(『東の智慧 西の思想』智山勸学会, 1987, pp. 314-335) を付加しておく。

- (3) 大正 25, No. 1509, 655c.
- (4) 同, 191a.
- (5) 同, 190a.
- (6) Unrai Wogihara ed., *Abhisamayālamkāraśāstra*, Tōyō Bunko: Tokyo, 1932 (Repr., Sankibo, 1973), p. 23, ll. 2-6. ハリパドラはここで次のように注釈している。

ity evam-ādi-śruta-cintā-bhāvanāmaya-jñānodaya-krameṇa sarvākāra-jñānādhigamāt pāraṃ prakarṣa-paryantam etīti vigr̥hya, kvipi sarvā-pahāriloṇe 'nityam āgama-śāsanam ity atuki, tatpuruṣe kṛti bahulam ity aluki ca karma-vibhakteḥ kṛtaḥ pāramis, tad-bhāvaḥ pāramitā. prajñāyā dharma-pravicaya-lakṣaṇāyāḥ pāramitā prajñāpāramitā. この部分は高度な vyākaraṇa の知識に基づいて論述されており、解釈は非常

に困難である。また、この箇所に対応するチベット語訳も欠けているばかりでなく、サンスクリットの伝承にも異なりがあり、それに拍車をかけている。このことについては既に先学によって指摘されている。三枝充恵『概説—ボサツ、ハラミツ』(講座・大乘仏教 第一巻『大乘仏教とはなにか』平川彰・梶山雄一・高崎直道共編, 春秋社, 1981, pp. 143ff.)

- (7) Louis de la Valée Poussin ed., *Madhyamaka-avatāra*, Bibliotheca Buddhica IX, Osnabrück, 1907 (Repr. Tokyo), p. 30.
- (8) ここで引用される不規則なコンパウンドの規定は、以下のようなパーニニ・スートラに相当する。prṣ-o-dara = ādi-n-i yath-o-pa-diṣ-ṭa-m// (VI-3-109)「ブリショーダラ(=斑点のある腹を持った)で始まる複合語は〔習得した話者によって〕一般に教えられるように教示される。」(*Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, ed. by Sumitra M. Katre, University of Texas Press: Austin, 1987, p. 793. 結合語には明確な規則に従っていない多くの不規則なものがあるが、その代表的な例として語幹末の子音が脱落するブリショーダラ (prṣad uddaram a-sya = prṣ-o-dara-) <所有複合語 (Bahuvrīhi Compound)>があげられるのである。注釈によれば、文字の脱落(省略), prṣodara などに見える音声変異とオーグメントで、文法書に教えられていない考え方は賢者たちに通用している慣習の範囲内で有効とされる。(Cf. *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, ed. by Śrīśa Chandra Vasu, Motilal Banarsidass, 1988, vol. 2, p. 1241.)
- (9) R. Hikata, *Suvikrāntavikrāmi-paripṛcchā Prajñāpāramitā-sūtra*, Kyushu University, 1958, p. xi.
- (10) 三枝充恵, 前掲論文, pp. 141-145.
- (11) 宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』三省堂, 1954, p. 272; T. W. Rhys Davids & W. Stede, *Pali-English Dictionary*, London, 1921-25 (Repr. in India 1975), p. 454.
- (12) 渡辺章悟「中央アジア出土の般若経断簡 I—PV 第六現觀をめぐって—」『東洋学研究』, 第 30 号, 1993, pp. 41-67, esp., p. 44-45 参照。
- (13) この箇所は AD-PV 系統の各類書とも大同小異なので、その中から PV を引用した。
- (14) 現存の PV は他の類本と較べるとおかしい文脈になっている。特に agamana (到ることがない, 不到) は、他の諸本が pāpta (thob pa)「到る」とするのに対して逆である。agamana は性的な不義・不法行為も意味するが、ここでは意味が通らない。仮にアオリスト (3 pl. a-gaman) では主語が理解できないし, ārtha が不可となる。また sarva-dharmān (pl. Ac. であり, cerebral ではない) āma-gamana としても、意味が理解できないので、一抹の疑問を残しながら上記本文のままの訳文にしておく。
- (15) P. L. Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Texts No. 4, the Mithila Institute: Darbhanga, 1960, p. 102.
- (16) T. Kimura ed., *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* IV, Sankibo:

- Tokyo, 1990, p. 1, l.20.:『大品』『遍歎品』第44 (T8, No. 223, 311c) に対応する。
- (17) 大正 25, 647a21.
- (18) 同 650a27-650b15.
- (19) F. Edgerton ed., *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven, 1953 (Reprinted in India, 1970), p. 341.
- (20) Kern and B. Nanjyo ed., *Saddharmapūṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica Vol. 10, Osnabrück, 1970. なお、漢訳は羅什訳『妙法蓮華經』(大正 9, No. 262) による。
- (21) *Index to the Saddharmapūṇḍarikasūtra*, fascicle VI, ed. by E. Ejima et al., 1989, p. 591.
- (22) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』岩波書店, 1970, pp. 182-182; 藤田宏達訳『梵文和訳無量壽經・阿彌陀經』法蔵館, 1975, pp. 178; K. Fujita ed., *The Larger Sukhāvattvyūha*, vol. 1, Sankibo: Tokyo, 1992, pp. 11-16; É. Lamotte trs., *l'Enseignement du Vimalakīrti*, Bibliothèque du Muséon, vol. 51, Louvain, 1962, p. 98; 大鹿実秋編「チベット文維摩經テキスト」『インド古典研究』1, 成田山新勝寺 1970, p. 146; Kern and B. Nanjyo ed., *Saddharmapūṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica Vol. 10, Osnabrück, 1970, p. 1, ll. 6-9.
- (23) この表現は以下のような般若經に等しく見られるものである。AS p. 1, l.7; DS p. 93, l. 6; PV p. 4, l. 5; SS Bibliotheca Indica, No. 1006, 1902, p. 4, l. 1. なお、最後の定型句はチベット語訳『十万頌般若』では, *sems kyi dbang thams cad la, pha rol tu phyin pa'i mchog thob pa sha stag ste* (*Śatasāhasrikā P.*), 『翻訳名義大集』では, *sems kyi dbang thams cad kyi dam pa'i pha rol tu son ba thob pa* (Mvy, no. 1088) 「心を自由にはたらかし得るあらゆる最高の能力を完成している」とする。
- (24) *Abhisamayālamkāraḥ*, ed. by U. Wogihara, pp. 10-11.
- (25) 『律蔵』*Vinaya-pitaka* I, p. 183; DN. III, p. 83; MN. I, p. 4; SN. III, p. 161; AN. I, p. 144 etc. に見ることができる。
- (26) 大品系般若經では、『光讚經』『大般若波羅蜜多經』にのみ対応訳がある。「一切想の無極に度するを得る」(一切想得度無極)『光讚』(T8, 147a); 「心自在なる第一究竟に至れり」(至心自在第一究竟)『大般若波羅蜜多經』第二会 (T7, 1b)。古訳である『放光般若經』と『大品般若經』には欠けている。法華經では羅什訳『妙法蓮華經』「皆是阿羅漢。諸漏已尽無復煩惱。逮得已利。尽諸有結。心得自在」(大正 9, 1c) を見ると、この部分は簡潔に「心得自在」のみで、*parama-pārami-prāpta* に相当する訳語はない。ただし、竺法護訳『正法華經』(T9, 63a) ではやや詳細になっていて、サンスクリットに対応する「一切由已獲度無極」という記述がみられるので、系統の相違を考慮する必要もある。
- (27) この対告衆の比丘の特質についての定型句は、上記の注(22)に見られるが、「般

若経」には冒頭箇所ばかりではなく、本文中にも見られる。例えば『八千頌般若』(AS, Vaidya ed., p. 230) 参照。そこでは阿閼如來の会座に集まった〔比丘衆の特性〕とするように、さらに一般化されている。

- (28) この形はパーリ語や仏教混交梵語 (Buddhish Hybrid Sanskrit) にある。エジャトンによれば, *pāraṃgata* は過去仏あるいは菩薩の名前として華嚴經に登場する。ただし、この格形は慣用やリズムに従って省略されることもある。その省略された *pāragata* という形としてはジャイナ教の聖者である *tirtham-kara* やブッダの異名としても用いられる。

- (29) この etymology を背景にしたマントラの解釈が、般若心經の呪に見られる。そこでは次のような構造になっている。

gate gate pāra-gate pāra-saṃgate bodhi / svāhā

ite ite pāram ite pāram ite prajñe

gate と ite が対応するが、以下同じように *pāra-gate* と *pāram ite*, *pāra-saṃgate* と *pāram ite*, *bodhi* と *prajñe* (ともに Fem. Sg. Voc. である) がそれぞれ対応する。これらの語は最後の「悟り」(*bodhi*)、あるいは「悟りの智慧」(*prajñā*) に係って、「悟りよ」「智慧よ」と呼びかける (Voc.) 構造になっている。また、*pārami-*, *pārami-* は概して *-gata*, あるいは *prāpta-* と一緒になって「完成する、達成する」という意味のコンパウンドとなるが、それも先の etymology を予想させるものである。ex. *pāramiṃgata* (SP p. 451, l. 5); *pārami-prāpto* (SP p. 35, l. 6)。

- (30) しかし、この解釈には *tena-arthena* (その意味で) という言葉が直結しない欠点がある。そこで、これを先の解釈のように etymology とする別の見方を採ってみたい。すなわち、この *pāram-itā* の *itā* を *gata* と読み換え、*pāramitā* を「極限に (*pāram*) なる (*ita*)」あるいは「極限に (*pāram*) 広がった (*gata*)」、すなわち「区別できない」と解釈する。その場合、*gata* が $\text{bimbara} \times 10,000,000$ という阿僧祇に次ぐ長大な時間の単位 (『千万の頻婆迦他と名づけ、迦他を過ぐるを阿僧祇と名づく』『大智度論』大正 25, 87a, É. Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna*, Tome 1 Chapitres I—XV, Bibliothèque du Muséon, vol. 18, Louvain, 1949: Réimpr. 1966, p. 247) であることを考慮すると、その数の余りの大きさに区別できない (*abhinna*) という読み込みがあると見ることができる。そうすれば、「無限によって区別できない」とことと「無限になる」ことが、語源解釈によって結ばれ、*tena-arthena* が意味を持つと考えるのである。

- (31) 大正 25, 191a.